現地の声を聞き続けよう

沖縄県知事選を見て

寄稿　瀬戸　麻理乃（文3）

普天間飛行場の名護市辺野古移設の是非をめぐり行われた沖縄県知事選。辺野古移設に反対する新人の前那覇市長・翁長雄志（おながたけし）氏が、移設を容認する現職・仲井真弘多（なかいまひろかず）氏らを破って初当選を果たした。現地で知事選をつぶさに見てきた文学部人文・ジャーナリズム学科3年次の瀬戸麻理乃さんにルポを寄せてもらった。

秋が深まっても、沖縄は熱かった。在日米軍基地が集中する同県で、11月16日、知事選挙の投開票が行われた。普天間飛行場（宜野湾市）の名護市辺野古移設をめぐり、反対派と推進派の候補がぶつかり合う――。と思いきや、菅義偉官房長官は「過去の問題」と切り離し、選挙の争点にならないと強調した。しかし、地元新聞は、連日基地問題を大きく取り上げている。現地の様子を自分の目で確かめるべく、11月14日から5日間、沖縄に滞在した。

▶ 新基地建設に反対する市民が辺野古に集まる

基地前で自問

投開票を翌日に控えた11月15日、現地で合流した藤森研文学部教授とともに嘉数高台の展望台から普天間飛行場を一望した。住宅地に囲まれた基地の中に、オスプレイがずらりと並ぶ。危険性は一目瞭然だった。

「これを辺野古の海に移すことが、沖縄の基地負担軽減なのか。軍事力強化と基地の恒久化につながらないのか」。渦中の光景を目の前に、自問自答した。

さらに北に移動して、辺野古へ向かった。海兵隊基地キャンプ・シュワブのゲート前は「辺野古埋立阻止」のプラカードを掲げる人で埋まっていた。

「知事選勝利！」と声を合わせ、連帯を強めあう人々。私もその雰囲気に巻き込まれた。

◀ 沖縄知事選で当選が決まり記者会見する翁長氏。左は藤森教授

座り込みテント村にも立ち寄った。何年も抗議活動を続けている男性が、青く透き通る海を背景にこう言った。「我々の抵抗がなかったら、今この景観はない」。抵抗は沖縄の未来を創る活動だと思った。

「民意伝える」

迎えた投開票当日。投票を締め切った午後8時ちょうど、「翁長氏当選確実」の文字がテレビのテロップで流れた。県内移設反対を前面に掲げた翁長氏の圧勝だ。

その1時間後、那覇市にある選挙事務所に移動した。さぞ盛り上がっているだろうと思いきや、意外にも落ち着いていた。万歳三唱の空気はもう感じられない。

これからは、移設工事を強行しようとする政府に、どう立ち向かっていくかが問われる。

選挙で示された「反対」の民意。「しっかりと伝えたい」と、メディアのインタビューに答える翁長氏。

当選の喜びは、この時すでに、次のステージに向かう覚悟に変わっていたのかもしれない。

◀ 琉球新報の号外を手にする瀬戸さん

抵抗やまず

知事選挙後も政府の姿勢は変わらない。12月14日の衆議院選挙もまた、沖縄においては基地移設が最大の争点だ。

普天間をめぐる一連の論争は、一つの基地を作るか作らないかの単純な議論ではない。戦後69年たっても、日米両政府に軍事基地を押し付けられていることに抵抗しているのだ。

安全保障の問題は日本全体で考えるべきことである。「反対」の声を上げ続ける沖縄に、少しでも耳を傾けてほしい。

専修大学杖道会　創設15周年

▶ 演武会で専修大学杖道会のみなさん

トップクラスの指導陣　今夏も都大会で活躍

専修大学杖道会が創設15周年を迎え、11月15日に記念演武会が神田キャンパスで開かれた。

演武会では学生、卒業生、指導者の演武が披露された。懇親会は東京都「アルカディア市ヶ谷」で開かれ、総勢70人が出席して和やかに15周年を祝った。

▲ 長年の指導に感謝して顧問の宇都教授（右）に感謝状が贈られた

杖道は長さ約128チンの樫の丸い杖を用いて行う形の武道。本学の杖道会は1999年に誕生。今夏の東京都杖道大会では全8階級（七段～一級以下）のうち4階級を制覇した。

初期には部員がなかなか集まらない状態が続いた。東京都杖道大会で学生が初優勝した2003年ごろから部員が増え始め、現在は50人を超える。

発展の一躍を担ったのが石﨑珠枝さん（平18経済・旧姓河上）、岸野紘子さん（平18経営）、秋山悟さん（平18文）ら。

岸野さんとペアを組んで社会人になっても杖道を続ける石﨑さんは「入部した頃、部員は10人足らず。それがこんな大きな会になって感慨深い」と話す。

同会の特徴は経験豊富な指導陣に支えられていることだ。顧問の宇都榮子人間科学部教授（錬士六段）をはじめ、古川瞬也師範（範士八段）、桝井一之副師範（教士七段）、上田敦子副師範（同）という杖道界のトップから直接指導を受けている。学生たちは、生田キャンパスのほか、東京・千代田区にある日本経済新聞社杖道部で出稽古も行っている。

学ぶのは技術ばかりではない。

元代表の村上晋之介さん（法4）は「礼儀作法など社会に出る際に大切なものも教えていただいた」と言い、前代表の山﨑真美さん（商3）も「練習は厳しいが、武道サークルとして楽しく活動している。そこが魅力」と話す。

宇都教授は「学生たちが楽しいと言ってくれるのが何よりです」と同会生みの親として喜びを語っている。

外国語のススメ　外国語教育研究室

―●34●―

個人旅行だから楽しい

奥村　経世　経営学部准教授

私と妻は、数年に一度ヨーロッパを旅行しますが、団体旅行で行ったことはありません。妻がヨーロッパ史の研究者なのでガイド役、私は海外での運転に慣れているのでレンタカーの運転手役になります。そして旅行先は、ほとんどがヨーロッパの田舎です。特にフランスには「フランスの最も美しい村」という組織があり、ここに登録されている村々をよく訪ねます。

例えば、フランス西部のペルージュという村＝写真＝は、人口は約50人で、14世紀ごろの町並みがそのまま残っています。大都市のリヨンからバスなどを利用して1時間ほど。自家用車でなければなかなか行けないところです。しかし、「フランスの最も美しい村」に登録された約150の村の中でも特に美しいといわれていて、リヨンでサミットが開かれた際には、各国首脳が見学に訪れたそうです。私たち夫婦は、中世貴族のお屋敷そのままのホテルに泊まり、伝統的な料理を食べ、早朝から、鶏の鳴き声がする人けのない村をのんびりと散歩しました。

有名な観光地には、有名になるだけの理由があり、行けば感動します。しかし、名所を見て「テレビで観たとおりに美しい」と思ってしまうよりも予想もしない感動が、田舎にはあります。それは個人旅行だからこそ得られるものです。英語の通じない国でも、「こんにちは」「さようなら」「ありがとう」と1から10までが現地語で言えると、旅が10倍楽しくなります。そうやって、私たちは個人旅行を楽しんでいます。（主な担当は経営管理総論）

※短縮版。全文はCALL研究室ホームページで。